

川柳と道連れ （還暦から古希への道）

宮下恭一（高18回）

還暦を間近かに控えて焦っていました。せめて趣味のひとつも身につけたいと一念発起！

駅前のカルチャーセンターを覗いてみた事がそもそも始まりです。

俳句・短歌はいくつも講座があり、目移りしているところへ、川柳だけが1講座であり、しかも土曜日（第2週と第4週）の夕方ということで、会社勤めの身としてぴったりはまった感じがして申し込みました。

早速、体験入学と称して教室に出たところ、面白そうに思え引き続き次回も出る。自分の句を作って出すこととなり、いざ作り出したはいいものの、何とも理屈っぽい句ばかりで、今もノートを見返すと恥ずかしい思いに駆られます。

20年を猛烈社員として駆け抜けてきた人間にとって、この大転回は、大変きついものがありました。しなびた右脳を少しずつほぐし、柔らかくしていく過程がまず必要だったのです。

しなびきつた右脳はなかなかほぐれてくれず、栄養分を送り込むことが大事とわかり、川柳の名句と云われるものを数多く味わうことに心掛けました。

自分の中にまだ眠っているものは何か、今までの人生の中でやり残してきたことがあるのではないかと、過去の記憶の中へ探索の旅に出かけていました。

川柳への思い

句を作っている過程で、自分の人生を振り返り、また新たに生き直してみようと思ったりすることができました。自分を再発見し、こんな面もあったんだと再認識することがしばしばありました。

会社人生の終盤近くに、川柳とめぐり会い、句を作る喜びを次第に覚えていく中で、いよいよ退職を迎えました。その時の思いの数々を句に込める事により、なぜか心も軽くなり、気持ちの整理もつけやすかったのを覚えていきます。

「今後とも、世の動き、時の移ろいを、じっと川柳の眼



●みやした・きょういち
飯田市大通2（羽場3区）出身
東北大学電気工学科卒業。東京電力（株）で主に火力発電部門に勤務。還暦を機に興味として川柳を学ぶ。苦吟している時が、実は癒しの時というこのアイロニーが面白い。

ところで川柳について、簡単に説明しておきます。

川柳は十七音の短詩（五七五が定型）であり、江戸中期に隆盛し、現代まで約260年にわたり多くの人の心を動かし、長く受け継がれてきております。俳句とは異なり、切れ字や季語などの制約がなく、多くは口語を用います。人情の機微、世の不条理、人生の喜怒哀楽などをうがち、おかしみ・機知・諷刺・アイロニーが特色です。

川柳を作り始めて

今までの会社勤めの中で、ビジネスの文書作りを徹底的に刷り込まれた身には、論理より情感を重んじる川柳に戸惑いを感じつつ、使い込んだ左脳から、しなびた右脳への切り替えが必要となり、ものの感じ方、見方の大転回を強いられました。

高度成長の真ただ中からバブル崩壊、そして失われた

を持って、見続けていきたいと願っています」と初参加の合同句集のあとがきに書いて残しています。

その後第二句集のあとがきには、スランプに陥ったことが書かれてありました。「以前は、怖いもの知らずに作っていたような気がします。勢いもありました。近頃はなかなか水が湧いてきません。別の水脈をまさぐっている『手探りの秋』です」と。

雅号の一穂

『手探りの秋』の真つ最中、たまたま古い辞書をめくっていましたが、「香煙一穂」の文字が飛び込んできました。あっ、これはいいなあと、直観というか啓示というか不思議に吸い込まれる感じを覚えました。

川柳の雅号としては「いっすい」と呼ぶより、「いっほ」のほうが、柔らか味があつて、響きもいいと感じ、これに決めました。師の助言もありました。

川柳教室は2人からスタートし、その後9人と賑やかになるにつれて、いろいろな人のいろいろな川柳があつてもいいなと思うようになりました。

多様性の中に、自分に合った新しい川柳の価値を見つければいいなと思います。自らのこころの内面を吐露する創作川柳を目指して、内面に深く根ざした句をと願って

います。

文芸川柳発祥の記念碑

京成上野駅出口から西郷どんの銅像へと登っていく石段のたもとに、金色のアヒルの像をモチーフとした「俳風柳多留発祥の地記念碑」ができました。文芸川柳を確



川柳の原点である俳風柳多留発祥の地記念碑（縁起物の柳樽の上に金のアヒルの像。柳樽に刻まれている句は「羽のあるいひわけほどはあひるこが」）

縁は、実はそういうことだったのかも、めぐる因果の不思議さに思いを馳せる。

胎内の劫火のしるし残りけり

故郷の飯田は昔、大火で街並みの多くが焼けた。その直前に戦争もあった。幾多の困難を父母たちは、その都度乗り越えてきていたことを改めて想う。

大火の時、実は私は母親の胎内にいたことに、最近はつと気づいた。胎内から大火を見ていた！ 母親の心臓の動き、血流の変化などを通して何かしら感じ取っていたのかも知れない。

少年時代、近所のボヤを目の当たりにした時、心臓のドキドキ、呼吸の乱れなど異様な感覚に襲われたことを覚えている。今にして思えば胎内経験がそうさせたかもしれない。いよいよ自分史は、出生から胎内経験にまで遡る。

核の傘ガラスの中の擬似平和

北の脅威が高まる中、傘頼みの抑止力の実効性に不安を覚えて。

立した「俳風柳多留」刊行250年を記念して最近建立されたものです。私の川柳の師、尾藤一泉氏が中心になり、つくられたものです。ぜひ現地に行ってご覧下さい。（上段写真参照）

10年の歩みを振り返って

還暦から古希までの間に作った川柳のうち、数句を選び、ひと言添えてみました。生きる証しとして、己を見つめた自分史の一部としたいと考えています。

へその緒を首に巻いていた寒がりや

自分史を川柳で作ってみる機会があり、へその緒にまつわる川柳ができた。母の思い出に繋がる句。終戦直後の食べ物も少なかった時代、やっと産み落とした児が、へその緒を首に何重にも巻いて出てきたことを、母は何度も口癖のように私に話してくれた。へその緒の話を通して母と子のきずなをいつまでも通わせていたかったのかもしれない。

私は信州の冬に育ち、東北の冬に耐えてきたのに、東京の生活が長くなると、歳と共にすっかり寒がりやになってしまった。

ふと、生まれた時のことに思い当たった。寒がりやの由

国勢調査めぐる家族の漂流砂

5年毎の国勢調査員をした時、日本の家族の漂流する姿に愕然とする。

頸木解け冬陽のように人恋し

会社員生活に別れを告げた時、あの肩の感じた軽やかさは何だったのだろう。そして厳しい冬の寒さがひととき緩み、射し込んでくる陽光のように無性にヒト恋しくなった。

私の川柳はまだまだ道半ば。この先はさらに奥深く遠くまで続いているようです。今後とも、この道をいつほいっぽ踏みしめて歩んでいきたいと思っています。



写真と川柳をコラボさせた「フォト川柳」に挑戦してみました